
その他

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究11
P.101-105 (2023)

ヒロシマ原子爆弾投下後の医療救護班での体験

Experiences of the Medical Rescue Team after the Hiroshima Atomic Bombing

渡邊 和 信*

WATANABE Kazunobu

要 旨

1945年8月6日8時15分広島市へ人類史上初の原子爆弾が投下された。

湯本貴恵さん当時17歳は鳥取県の看護婦養成所を卒業し、地元の鳥取県農業会厚生病院に勤務していたが終戦翌日の8月16日、医療救護班2班として原子爆弾が投下された広島に向かった。その際の医療救護班で体験されたことを伺った。救護所には多くの被災者が集まり、医療救護がおこなわれた。悲惨な状況であっても患者のため、目を背けず処置や看護を日々実践されていた。救護活動へ行かれた方たちは原子爆弾との情報はなく、いずれも入市被爆をされている。情報が無い中であるが、自らも危険な状況での活動であった。お話の途中には、涙ぐまれる姿もあり長い年月が経っても、感情が揺さぶられる衝撃的な体験をされたのだと改めて認識し、同時に原子爆弾投下の悲惨さをわずかながらも感じた。貴重な体験を記録し、伝えていく必要がある。

索引用語：ヒロシマ原子爆弾、医療救護班、看護婦

Key words：Hiroshima Atomic Bomb, Medical rescue team, nurse

1. はじめに

1945年8月6日8時15分広島市へ人類史上初の原子爆弾が投下された。湯本貴恵さんは1944年(昭和19年)春に鳥取県の看護婦養成所を卒業し、地元の鳥取県農業会厚生病院に勤務していたが、終戦翌日の8月16日、医療救護班2班として被爆した広島市に向かった。これは1942年に制定された「戦時災害保護法」により負傷者救助の一つとして医療の保障が定められ、空襲などの被害があった際は近隣県から支

援に行くこととされていたためと考えられる。

また広島市へ投下された爆弾が原子爆弾とは一般市民には8月15日の終戦を迎えるまで知らされず、その後も情報の入手がない市民は特殊爆弾やピカドン等と呼称していた。さらに全国の医療従事者は厳しく疎開を禁じられ、空襲時の災害に備えていたため、広島市の医療従事者は原子爆弾の被爆により、全滅に近い憂き目を蒙った¹⁾とあり、原子爆弾投下後は軍や近隣からの医療支援や、残された医療従事者、学生、市民による救護活動が行われた。

2022年現在、原子爆弾投下後77年が経過し、当時の状況を知る人も限られてきている。湯本さんはインタビュー時、95歳であったが、聡明であり当時の

* 順天堂大学医学部附属静岡病院

* Juntendo University Shizuoka Hospital

状況を鮮明に記憶されていた。94歳時には「記録をしていたから、今でも話せます」と国立広島・長崎原子爆弾死没者追悼平和祈念館からの被爆体験（入市被爆）の証言映像²⁾でも答えられている。今回、証言映像では話されなかった内容や、戦後の看護婦としてのご活動など伺った。知らされないまま自身も被爆しながら救護活動を行われた実際を記録することで、二度と起きてはならない原子爆弾投下の悲惨さを知ることの一助にしたいと考え報告する。

II. 方法

1. インタビュー

1) 実施日時

2022年11月19日10時～11時30分

2) 方法

Zoomによるオンライン

ご自宅へ伺い、協力者がセッティングし行われた。

2. 倫理的配慮

体験されたことのインタビューであり、内容の特徴から本名により記録し、紀要への投稿を行うことを口頭、書面にて説明し同意を得た。ただし公表の際は、プライバシーに十分な配慮を行い、湯本さんによる記載内容の確認を得た後に公表することとした。

III. 被災状況

広島市によれば³⁾原子爆弾による死亡者数は、正確には分かっておらず、放射線による急性障害が一応おさまった1945年12月末までに、約14万人が亡くなられたと推計されている。8月6日原子爆弾投下当時、広島市には居住者、軍人、通勤や建物疎開作業への動員等により周辺町村から入市した人を含め約35万人がいたと考えられている。爆心地から1.2キロメートルでは、当日にほぼ50%が死亡し、それよりも爆心地に近い地域では80～100%が死亡したと推

定されている。

IV. インタビュー内容

1. 幼少期～高等小学校

「生家は農家で父親は農協の精米所へ出ていました。家の農業は母親一人でやっていました。私は7人兄弟の真ん中で高等小学校へ行き、農業の手伝いはせず妹二人と7歳離れた弟の子守をしていました。」「弟をおんぶしていたときに、頭をぶつけてしまい沢山、血が出てしまったことがありました。大人は近くにいないし、どうしようと思ってタオルを頭に当てて手当をしたことがあります。いま思えばそのときから看護のようなことをしていました。」

「小学校6年生のころに新聞で従軍看護婦というのを知り、女でも国のために働けると知り看護学校へ行くと思いました。」

2. 看護学校入学～病院勤務

「昭和17年に高等小学校を卒業して、鳥取県農学会厚生病院の看護婦養成所へ入学しました。寮は一部屋5～6人でした。私は人を好き嫌いないタイプなのでだれとでも仲良くしていました。」「包帯や注射針なんかも自分たちで再生していました。病院から寮へ戻る廊下で包帯を巻きながら帰ったのを覚えていません。」「休みの日は好きな編み物をしたり、本を読んで過ごしていました。」「19年3月に卒業し、そのまま病院で働きました。当時は3か月ごとに部署が変わっていて耳鼻科や婦人科外来や外科病棟にいました。そのときの病院は家族が着替えや食事を作り食べさせていました。看護婦は検温や記録、注射、回診の介助など医師の手伝いという感じでした。」「飛行場の滑走路を作るということで、救護班として出ることがありました。救護カバンの中に医者でなくても使ってよい薬などを用意して行きました。」

「当時は真珠湾攻撃等は大きめにニュースになって

いましたが、他はニュースになっていなくて情報がありませんでした。県内で空襲があったことも知ったのは、戦争が終わって何十年もたってからでした。」

3. 広島市での医療救護

「8月6日に原子爆弾が落ちたとは知りませんでした。8日に医療救護班1班が出ると聞きました。私は14日に2班に選ばれて、包帯や消毒の準備をしていました。15日も荷造りをしているときに玉音放送があり、放送は聞いていませんが敗戦と知りました。戦争が終わったのに広島へ行かなくてはいけないのかなと思ったことを覚えています。1班とは会えず、申し送りは受けられませんでした。ですが外傷の方が多いので、その準備をしてほしいといわれました。自分のものは着替えを2～3枚と必要なものだけを持っていきました。」「医療救護班は全部で12名でした。看護婦として一緒に行ったのは6名で同級生と一級上と下くらいでみんな10代後半から20歳くらいです。」「医師は2名で、台湾の先生もいました。」「16日朝に出発し伯備線経由で芸備線に乗り換え、夜9時過ぎにつきました。道路の両脇に被災して避難している方たちのテントがありカンテラがついていて、その時から仕事が始まっている気がしました。3階の建物の屋上で一晩過ごしました。」

「17日朝からトラックが迎えに来て、爆心地から2.7km離れた己斐国民学校が救護所になっていて、ここで活動しました。長い行列がありました。救護所へ行く人、火葬された人のお骨を引き取る人や尋ね人を探す人などでした。荷物をおろしてすぐに救護を始めました。午前中は外来で、やけどの人やガラスが刺さったままの人、やけどで服が着れない人、それはとても残酷なものばかりを見ました。」

「午後は収容されている人で取れそうな耳からウジが出たりや鼻が千切れたり、足のかかとかめくれかけしており、ピンセットで皮膚を取ろうとしたら生きたウ

ジが出てきたりと目を背けたいときもありましたが、それでは患者がかわいそうだから辛抱して、今でも思い出されるのはそのようなことです。あとは女の人が外傷はないですが、腕章に鳥取県救護班とあったのを見て、私の手をぎゅーと握られ、娘のお産を手伝おうと鳥取県から5日に広島へ来たけど、爆弾が落ちて家の下敷きになって娘と赤ちゃんはどうなったか分からないと話してくれました。手のぬくもりを覚えています。救護活動は6日間行いました。」

「校庭の隅で火葬をしていました。一日中、やぐらを組んで燃やしていました。」「活動が終わった時に慰安のために宮島へ観光へ行かして頂きました。鹿がいたり、お土産があったり観光の人もいて、少し離れただけで全く違う世界のようにびっくりしました。」

4. 戦後

「2年たって広島へ行きました。木や建物があり当時は特殊爆弾と言っていました。原子爆弾投下後の救護活動に行ったことが、国の役に立てたことだと思っています。20歳の同級会の時に先生からお前が一番いいことをしたよと言って、ほめてくださったことを覚えています。」

「当時の看護婦は適齢期で24～5歳になると結婚して、仕事をやめるとなっていました。ですが私のいくつか上の婦長さんが結婚してからも働きたいと思っていたところ、職業安定所かどこかの介入で病院に組合を作ることを奨励し、職員組合が出来ました。私も働きたいと思っていましたので、結婚してからも仕事が続けられるよう中心となって活動しました。昭和20年代のことです。その頃、24か5歳で婦長となり看護学校で教える人は再教育が必要といわれ、それを受け、病棟婦長と教務主任を兼任していました。県立病院になったときに、教育婦長となりそのあと看護学校へ異動して教務主任となりました。そのときも6か月の講習を受けました。昭和63年の退職まで看護

学校でした。広島での経験は講義ではカリキュラムで時間が取れず、折をみて学生に伝えていました。保育専門学校が同じ建物だったので、こちらは授業で伝えていました。]

「退職後に、体験したことの手記を書いたり、昨年は話をDVDにしてもらい、同窓会で流してもらいました。」「今は川柳をしたり、機会があればこのようなお話をしています。」

V. お話を伺って

原子爆弾投下後の記録として蜂谷道彦のヒロシマ日記⁴⁾や17歳で被爆した少女の病床日記⁵⁾をはじめ日本赤十字や原爆協議会などからの報告が多数あり、近年は戦争と看護婦⁶⁾や戦争のある場所には看護師がいる⁷⁾と戦時下の看護職の活動を記した書籍が発刊されている。日本では第二次大戦後、77年間戦争がなく体験者から直接、話を伺う機会も限られてきている。しかし、看護職として戦時下に活動した歴史を知り、戦争、なかでも原子爆弾の使用が行われなかったために、その悲惨さを理解し後世へ伝える役割があると考えられる。

農業を営まれるご両親のもと、1927年に生まれた湯本さんは弟妹たちの面倒を見ながら高等小学校へ通い、穏やかな日々を過ごされたと思われる。しかし1941年の真珠湾攻撃に始まる第二次世界大戦の開戦後はお国のために、と新聞で読んだ従軍看護婦を目指し看護学校へ進学し、看護婦となった翌年の1945年(当時17歳)に原子爆弾投下後の広島市へ医療救護班として派遣される。

8月15日、終戦となり第二総軍司令部は戦災応急処理の指揮を解除したため、軍隊が果した救護・復旧作業を県・市が行なうこととなった。支援実施母体の変更から、混乱が想定されるが、そのような中でも、救護所には多くの被災者が集まり、医療救護がおこなわれた。悲惨な状況であっても患者のため、目を背けず処置や看護を日々実践されていた。

湯本さんをはじめ、救護活動へ行かれた方たちは原子爆弾との情報はなく、いずれも入市被爆をされている。情報が無い中であるが、自らも危険な状況での活動であった。しかし、戦争被害者のためと、身を挺した活動を行われていた。また看護婦は10代後半から20歳と若く、この体験がその後の人生にどのような影響を及ぼされたかと考える。湯本さんは戦後、働く女性の先駆けとなる活動や、看護学校の教員として看護師養成を続けられた。小学生のときに思われた「国のため」が患者のため、学生のためとなり、多大な地域貢献をなされたと考える。

鳥取県原子爆弾被害者協議会より鳥取県派遣救護班の活動として多くの方が体験記を寄せられている(湯本さんもそのお一人である)⁸⁾。他県からも多くの方が原子爆弾投下後の救護活動へ行かれている。核爆発による衝撃は超高温・爆風となり熱線熱傷と建物倒壊、ガラス破片の飛来などから死者、負傷者数が多大になること、残留放射線や内部被爆により支援者も被爆する可能性があることから、災害看護として最も悲惨な状況が原子爆弾投下後の支援活動と考える。このような状況を体験された方は少なくなっている。あまりにも悲惨な体験のため、話されない事象もあるかもしれない。しかし残された資料や、お話しいただいた湯本さんの体験を私たちは忘れず、後世へ伝えることで、原子爆弾使用が二度と行われることがないように看護職として声を上げることが必要と考えた。

おわりに

お話の途中には、涙ぐまれる姿もあり長い年月が経っても、感情が揺さぶられる衝撃的な体験をされたのだと改めて認識し、同時に原子爆弾投下の悲惨さをわずかながらも感じた。この貴重な体験を記録し、伝えていきたい。

つらい体験をこれからの看護師のためと貴重なお話をしてくださった湯本貴恵さん、Zoom設定、適切な

補足でインタビューをスムーズに行えるようしてくれた渡邊聡さん本当にありがとうございました。

VI. 文献

- 1) 広島平和記念資料館 (2022.12.1) : 広島原爆戦災誌第1巻 <<https://hpmm-db.jp/book/>>
- 2) 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 (2022.10.1) : 証言映像湯本貴恵さん <<https://www.global-peace.go.jp/index.php>>
- 3) 広島市 (2022.12.1) : 原爆被害の概要, 死者数について <<https://www.city.hiroshima.lg.jp/>>
- 4) 蜂谷道彦: ヒロシマ日記初版, 平和文庫, 東京都, 2010.
- 5) 田村慶子: ヒロシマの夜の病棟から初版, 太平出版社, 東京都, 1977.
- 6) 川島みどり, 川原由佳里, 山崎裕二ら: 戦争と看護婦初版, 国書刊行会, 東京都, 2016.
- 7) 難波妙, 榎田倫道, 松本圭古ら: 戦争のある場所には看護師がいる第1版, 日本看護協会出版会, 東京都, 2022.
- 8) 鳥取県原爆被害者協議会: 原爆と地獄補遺ー広島被爆と鳥取県派遣救護班の活動ー, 2019.